

第四回研究会（公開）

「修養と

教養の岐れ道」

— 明治から大正期を中心に —

講師…大澤絢子

（日本学術振興会特別研究員PD）



同情は如何にして修養するか
如何なる人が同情を受くるか

大澤絢子 (Yuko Ohsawa)
慶應義塾大学 新渡戸稲造
研究員



写真出典：国立国会図書館蔵

2023年
3月18日（土）

時間 13:00～15:00 講演
15:15～17:30 質疑応答

場所 慶應義塾大学三田キャンパス第一校舎 134 教室（※ Zoom 同時配信）

講演要旨

修養とは、主体的に自己の精神や品性を養うことで、人格向上に努める思考や行為をさす。明治の初め、サミュエル・スマイルズの *Self-Help* の翻訳である中村正直の『西国立志編』において、*culture* や *cultivation* といったことばが「修養」と訳された。以来、修養は、自己の精神面を高めようとする志向として日本社会に浸透していく。

一方、人格向上のために書物に向かう文化は、教養主義と呼ばれている。読書を通じた知の習得を重視する教養主義は、学歴エリートを中心に明治末から大正期に始まり、いわゆる大正教養主義が形づくられた。努力や習得を通じた人格向上を志向する点において、修養と教養は同質的なものであった。

本報告では、修養と教養が分岐する地点に立ち戻り、両者の関係性を再考したい。取り上げるのは、新渡戸稲造や倉田百三などのエリート層。そして、非エリート層の働く大衆である。それぞれの層が取り組んだ人格向上の営みを、宗教を軸に検証することで、学歴エリートが身につけるものとなっていく教養と、日常的な実践として大衆化する修養の連続性や相違点を浮かび上がらせる。

※ Zoom 配信も予定しております。オンライン参加をご希望の方は下記までお問い合わせください。URL をお知らせいたします。慶應義塾大学 眞壁宏幹 (hmakabe@keio.jp)。